

# 平成 14 年度報告 八木 三木男

## 中国経済と外国企業

### 1. 日本をはじめ外国企業の中国への進出急増

平成 14 年度、外国企業の中国への進出は急激に増加した。とくに、日本企業のなだれをうったような進出は、日本経済に衝撃を与え、製造業の空洞化を危惧せざるを得ないほどになった。あらためて、中国経済発展の衝撃の大きさが認識され、日本社会のさまざまな階層の人々の関心を集めるようになった。

そのことを示す一例として、前年の平成 13 年度の調査活動が糸口となって、深にある日系企業団地テクノセンターへの京都産業大学からのインターン学生の派遣が実現したことをあげる。この事業については、平成 14 年 10 月 22 日 NHK「クローズアップ現代」で放映され、NHK 出版『中国 2003 昇竜世界をめざす』（2003 年 1 月刊）第 3 部 激動する社会を生き抜く人々、に「中国の生産現場に学べ」として収録されている。近くて遠い中国は急速に世界に門戸を開きつつある。今後、日本の学生もさまざまな影響を受けるようになるだろう。

### 2. 中国東北部への視察

平成 14 年 9 月の中国東北部への視察に参加した。旧満州への日本からの資源の移動および第二次大戦大戦後の処分については、日本の対外投資の歴史として研究されてはいるが、現在も利用されている鉄道や建築物を実際に、目の当たりにすることは非常に印象的であった。公共設備だけでなく訪問先の国営企業においても、同様の体験をした。

東北部の特別の性質については、拙速な判断かもしれないが、第 1 に、市場経済への移行、社会主義経済からの脱皮が、沿岸部に比べてゆるやかであり、それゆえに痛みが大きいこと。第 2 に、地政学的な考察が、とりわけ複雑な人種構成が、東北部に特有のエネルギーとなるが同時に、難しい問題を持ち込むことになるかもしれないことである。

日本企業の進出先として重要な大連市は、今回は訪問することができなかったが、将来の現地調査を予定している。

### 3. 第一回公開シンポジウム「中国経済の将来と日本企業の役割」にパネラーとして参加

このシンポジウムには、日本企業を迎える中国側の有力者と中国に進出している京都の有力企業の代表者との対話がメインの会議であった。パネラーとして、中立的な客観的な視点を披瀝した。第1に、中国の経済発展の現状は、社会主義体制から市場経済体制への移行であるとともに、発展途上国のキャッチアップの段階であるということを強調した。現実には生じている現象、たとえば、低賃金労働の活用、外国技術の導入、深刻化する所得および地域格差、は発展途上国の経済に共通する特徴であり、それが体制移行によって加速されているのであるという理解するのがよい。そのような視点から、他の発展途上国との比較ができると説明した。第2は、中国社会は、不均衡ながらも、急速に近代化しつつあり、新しい社会階層（すなわち中間層あるいは中流階級）が生まれつつあり、そのような社会階層を形成しようとしている若い中国人を取り込む必要があることを強調した。また、中国から日本への元留学生の活用を提案した。また、日本的経営からの脱皮として、中国における企業活動における女性の地位の評価も必要であると指摘した。

### 4. 中国西部（成都、重慶）の視察予定

3月より、西安とならぶ中国西部の大都市である四川省の成都と重慶市を訪問する。「西部大開発」が注目される中で、次のような点に関心をもっている。四川省に関して、西部大開発における外国企業の役割、沿岸部の外国企業との関係、具体的な誘致政策、日系企業の現状についての評価、特に日系以外の企業との比較、外国進出企業に関するデータ入手、である。

### 5. 年度内完成予定のDP

- (1) 中国への外国直接投資統計に関する諸問題
- (2) 西部開発のための外国企業優遇策の有効性

### 6. 今後の研究計画

(1) 中国で活躍する日本企業と比較して、欧米企業の経営戦略の特徴を考察する。あわせて、WTOを通じて開放政策の圧力が強まるが、中国の産業政策との関係を検討する。

(2) 中国企業の対外進出が国策として奨められつつあるが、中国企業の競争力とその潜在的実力を検討する。新興工業国からの企業進出として、韓国、台湾との

比較を行う。

( 3 ) 中国元の為替相場の動向に注目する。